

保育者養成の今日的課題 (4)

～ 少子化傾向を中心として～

心理劇の活用 その1

前田 あけみ

一、はじめに

先号では、チーム観察法が、子供の心と人間関係や集団の発展の契機に関する“見え”を成立させる専門的トレーニング法として有効であろうことについて述べた。

ところで、次の保育者養成の主要な課題は、その“見え”に基づき、子供の発達を援助するかかわりはどのようなものであるかという、保育者自身の行為に関するものである。実践レベルでの、今ここの状況における未来志向的具体的行為に関するものである。

ところが、この根本的な養成課題に関して、これまであまり注目されてこなかったのではないかと危惧される。これまでの保育者養成の傾向について、日本保育学会の保育学年報一九八七年版「保育者養成」をてがかりに考えてみる。そこには代表的研究十四編がとりあげら

れており、四部門に分類されている。

① 保育者像と保育者養成（養成の目標となる保育者の理想像を明らかにする研究）：二編

② 学生の保育観とその変容（学生は養成課程の中でどのように保育観が変化していくかに関する研究）：五編

③ 教育・保育実習と保育者養成（実習の効果や効果的実習指導に関する研究）：五編

④ 保育者養成——外国と歴史の中から（諸外国の保育者養成や歴史の中の保育者養成のあり方に関する研究）

：二編

となっている。これらのほとんどの研究・分析の視点は、個人のパーソナリティー特性・保育観・保育経験の差異に注目するもので、今、ここでの保育状況における発展的ふるまいについては十分に触れられているとは言えない。

これまでにありがちであった規範的な養成課題は、一人一人の特性に応じた発達課題に即した指導という個別的な保育的現実の前に、ある意味で非力であり、実証

的養成課題は、保育の方向を必ずしも決定するといえない。実践的養成課題は、個別的な保育現実とつき合うことと、かわりを未来志向的に決定する内容を含んでいなければならないと考える。

ところで、ランゲフェルドは、実践科学としての教育学固有の自律的な研究領域あるいは、知識領域には、三つあると言っている。すなわち、

「(1) 第一は、教育を可能にしているような人間の世界に対する人間の関係である。この意味で教育学は人間的な世界の形成の存在学である。(中略)

(2) 教育学は、第二の固有の自律的研究領域として、具体的な教育状況の総合的経験的な規定因子の探究を行おうとする。実践科学が実践的であるためには、具体的な課題の解明が必要である。したがって経験的な探究方法を無視した実践科学の成立は、本質的に不合理であり、はじめから不可能である。(中略) もう一つ注意されなければならないことは、実践的なものを目指してある状況を規定するというこ

とは、この状況の中にも踏みこんでゆこうとすることを前提としているということである。

(3)さらに、第三の自律的な教育学研究の領域が注意されなければならない。教育学は、実現の学問である。それは、一般的あるいは、特殊な前提を探ることによって具体的な行為に至る道を研究するだけでなく、実際に子供や、教育者や、教材に対して、実践的に行ぜられなければならない。この行為への移行、問題の提起、行為の再検討が、まさに教育学研究の本質をなすものである。」〔注1〕

これに関連して、和田修二は、「教育学は実践的な学問である。教育学的事実の認識は、それ自体すでに規範的であり、価値判断を含んでいる。また、教育は物件の制作ではなく、生きた人間の形成であるが、人間は常に自ら何者かになるうとして主体的に働く存在であり、また何程かはすではじめから教育されてしまっている存在である。してみれば、教育を教育的状況から抽象された人間の知識をもとにして理解しようとするのは方向

が逆であって、教育学の基礎は、教育の外ではなく教育の中に、すなわち、教育的状況の直接的経験に還ってそれを記述し、解釈してゆくことに求められなければならないまい。倫理学や心理学の知見は、それが教育的な状況



の中でいかなる意味をもつか、教育する者や教育される者に、何がどのように体験され、解釈され、機能するのかが明らかにされぬかぎり、教育的には無意味なのである。ここに、教育学がまず教育的状況の現象学的解明として要請される所以がある。」(注2)としている。

保育学も実践科学であり、教育的要素を含むとすれば、このランゲフェルドや和田修二の述べる内容を保育学のものとしても読み込むことが可能であろう。また、実践即研究即養成を基本的立場とする筆者には、これらは、そのまま保育者養成の課題として成立する。

二、現象学的解明法としての心理劇

この保育状況の直接的経験に還ってそれを記述し、解釈すること、保育者や子供に何が体験され、解釈され機能するかを明らかにする一つの方法(技法)として、心理劇を活用できるのではないかと、筆者は考えている。

心理劇は、対人関係の心理療法である。心理劇は、日常生活の様々な体験を、今ここでの状況において、生活

縮図的に劇形式に再現し、種々の役割を取り、振る舞うことによって、人や自己に関する情緒や認識を深め、主として人間関係の発展を目指す行為的方法である。そこでは、アプリアリな主観の構成的先取りによってではなく、直接的な経験から、個々の現象を人間生活の全体的な関連の中で、言語のみならず行為によっても記述し、解釈するという仕方、すなわち現象学的アプローチを通して、人間の真理が探究される。心理劇の扱う次元は、現象学的次元なのである。

グレーテ・A・ロイツは、次のように述べている。「精神分析の理論的基礎は形而上学的な次元のものである。サイコドラマのそれは現象学的次元のものである。心理的過程は、精神分析においては心的器官の内部でさまざまな連関の帰結としてとらえられている。サイコドラマではそれとは異なり、マックス・シュラー(MAX SCELLER)の哲学的人間学の意味合いにおける、個人の現実の、そして完全な実存が探究の対象であり、個人の世界へのかかわりをその全体像において、また個人

の自己の様々なレベルへのかかわりを、この世界の一部として考察しようとしている。人間はこうしてかかわりを役割を通してのみ生きるので、モレノは、サイコドラマを理論的レベルで支えるために、役割に関する心理劇的理論を展開したのである。『役割を準拠の要因として用いると、人格とか自我とかいった他の準拠要因の使用と比較して、明らかに方法論上の利点がある。なぜなら後の二つは、はるかに抽象的で形而上学的神秘の後光に包まれているから』（モレノ一九六四）つまり、サイコドラマの現象学的認識においては、個人の経験は世界と出会いの固有の媒体なのである。そして、世界との出会いは、人間の実現とその治療にとって不可欠のものなのである」〈注3〉

筆者は、このような現象学的次元を理論的基礎とする心理劇は、保育状況の現象学的解明の具体的な方法として有効ではないかと考え、保育者養成法としての活用を試みている。そして、現在の課題は、次のようなものがある。

①保育状況の縮図的及び可逆的展開を可能とする心理劇をどのように活用することにより、子供の発達を援助・促進する保育実践力を高めることが可能なか。その理論と具体的な展開方法をさぐる。

②保育者の資質を高める心理劇技法とは、どのようなものであり、また、新たに開発しうるのかである。

三、心理劇の歴史とその基礎理念

心理劇は、一九二一年頃モレノ (J. L. Moreno 1889-1974) によって創始された。第一次世界大戦中に、当時哲学および医学の学生であったモレノが、ウィーンの公園で、子どもたちと行った、即興劇と自発的表現の遊戯からヒントを得ている。彼は、参加者に観察される心理療法的効果に注目する。こうした、遊戯 (PLAY) は、この時から、彼の医学観を変え、人の心理的、または心理—身体的疾病や健康の分野において、他者存在との情動的かかわりが重要性であると考えようになる。そして、当時医学と精神分析の領域では、人間を客観視

する傾向が支配的であったのに対し、彼は、出会いを中心に位置づけた。そして彼は、出会い・自発性・創造性・演技と行為に、新しい心理療法の基礎をすえた。一九二五年にニューヨークに移住して後、モレノは、対人関係の研究のため、ソシオメトリーを考案し、また人間関係の構造と、そこに生じる相互関係を観察し、療法的変容を引き起こすための心理劇を組織的に発展させた。

日本に心理劇が紹介されたのは、一九五一年外林大作によってである。一九五六年には、外林、松村康平、石井哲夫らによって心理劇研究会が発足した。その後、臨床・医療・教育・矯正・看護など様々な領域に心理劇が取り入れられてきた。一九八四年にはそれらの実践研究の交流と連合・提携の機運が高まり心理劇連合会が発足している。

モレノによれば、「心理劇は、それゆえ、劇的方法を用いて心理を探究する科学として定義される」(注4)とし、今ここでの出会いと力動性・相互関係を基礎理念としている。

心理劇では、人間を孤立した個人として捉えない。モレノは、人間関係の全体を社会的ユニヴァースと呼んでいる。心理劇は、その実践においては、社会的ユニヴァースの最も小さい形態、つまり、社会的アトムを扱う。社会的アトムとは、ある一人の人間と情緒的にかかわりのある全ての人々、あるいはその人との情緒的なかかわりを望むすべての人々、またはその人が情緒的にかかわりを望んでいる全ての人々を包括する言葉である。関係は、相互作用により、刻々と変化していく。こうした相互作用が、心理劇の対象である。

モレノに直接訓練を受けた、G・ロイツ(G. Leutz)やA・シュツェンベルガー(A. A. Schutzenberger)は、それぞれ次のように述べている。「心理劇とは、精神病や心身症を、対人関係や対人相互関係の障害とみなす心理療法である。こうした障害を治療する上で、心理劇は自発性に基づく劇的表現を用いる。(注5)心理劇は、自発性に基づく演劇的な表現であり、それは対人関係上の、または個人の心の中にある葛藤を、目に見え

るものにし（具象化し）、また、新たに体験し直すことに役立つ」△注6▽ 「心理劇と各自の問題を自由に討論し、共通の問題として設定し、その設定された場面に ついて演技し、その問題の展開を相互に見つめ、それを 自己が実生活で直接経験するのは、ある距離を保った 態度で役割を受けもって演技するというやり方で、自己 および他人の真実を探究する科学であるともいえる」

△注7▽ 日本で独自の心理劇活動を展開している松村 康平△注8▽によれば、「心理劇は、今、ここで、新し く振る舞うことが重視される。心理劇では、自発的に、 また、創造的に振る舞うことのできる人格形成が、目指 される。心理劇では、そこに成立している対人関係が発 展し、そのことにおいて関係の担い手としての個人が伸 び、その個人が伸びることが、対人関係を発展させると いう体験。その体験を豊富にすることができる方向へ、 社会を変革していく。その意欲が関係体験を通して育 ち、それを実現する態度が、今ここで新しくとれるよう にする。ここに心理劇の大きなねらいがある」△注9▽

このような心理劇の基本的命題は、

○どういう状況であるのか、

○どうして、この状況にいたったのか、

○どうしたら、この状況から脱出できるのか、
である。

四、専門的トレーニング法としての心理劇

ところで、心理療法以外の領域での心理劇の活用につ いて、モレノ自身は、どのように考えているのであろう か。モレノは、A・ブラットナー(H. A. Blatner)著 の『アクティングイン』の序によせて、次のように述 べている。

「私の諸アイデアが強調してきたのは、創造性(cre- ativity)と自発性(spontaneity)の影響は、生命力 (vitality)と精神的発達のもそもその根源に及ぶとい うこと、それだから、この影響は、私たちが参入してい る生活のどの領域にも及ぶということである。(中略) 私は、ブラットナーが、家庭、学校、ビジネスの世界へ

サイコドラマの活用に言及していることを、喜んでい
る。」〔注10〕

また、このような特質を持つ心理劇を専門的トレーニ
ングに有効と考えるプラットナーは、「サイコドラマの



方法は、問題の心理学的諸次元のなんらかの探究を必要
とする分野ならどれにおいても、有効に使えるだろう」

〔注11〕 「サイコドラマの方法の活用にとって一つの
重要な領域は、対人的技法と感受性の発達にある、これ
は援助的な専門職へのトレーニング中の学生にとっての
ものであり、先生、看護婦、牧師、警官、医学生、そし
て沢山の他のグループでは、そのトレーニングにおける
幾つかの項目を、教育の教訓的よりは、むしろ体験の様
式を通して扱うことが、極めてよくできる」〔注12〕
として、次頁のような表をまとめている。

従って、行為志向的心理劇を保育者養成法として使用
することは、伝統的な言語を用いる諸アプローチ（講義
形式）を補って、学生の状況における対人関係技法と感
受性および行為を高めるためのアプローチとして期待さ
れる。（具体的な心理劇の展開例を次号で述べる）

——次号につづく——

本稿は、前田あけみ「保育者養成における心理劇の

〈表〉

個人的発達 の 諸次元で
サイコドラマの方法を通して高めることのできるもの

自己 - 感知 (SELF - AWARENESS)

明瞭化、つまり内的感情、目標、強さ、弱さ、ニーズ、恐れなどの、
明瞭化。

成長、つまりより広い役割 - レポートリー、より現実的な身体 の - イ
メージ、自分自身の対人関係的スタイルの感知、習慣的諸応動などの、
成長。

センス、つまり責任性と自我の境界の強化されることのセンス。

対人関係的諸技能 (INTERPERSONAL SKILLS)

より大きな包容性、つまり信頼、自律、自主、自己 - 発露、自己 - 主
張のための。

増大する感知、つまり他の人の弱さ、恐れ、ニーズ、氣質的な差異の。
知識、つまりある共通のインタラクショナルな、そしてセマンティッ
クなコミュニケーションの困難の知識；能力、つまり自己 - 一致的に、
また明瞭に、表現する能力。

能力 - つまり聴くことの、共感することの、より少ないゆがみをも伴
うもの。

価値 - 体系 (VALUE - SYSTEMS)

人生の哲学、自分自身の死の意味についてのあるアイディア、その人
の人生の意義、"精神的" 関心との関係、非合理的経験への従事、冥想。

自発性 (SPONTANEITY)

役演性、即興性、参加つまり芸術、歌、ダンス、ドラマ、ユーモア、
不思議なものへの参加。

感覚 - 覚醒

身体運動、リズムのセンス、バランスのポイント、接触と官能性の適
切な使用。

想 像

諸技能の修得、つまり連想、夢、シンボル、イメージ、誘導される空
想、直観、ストーリーテリングを使用することにおける、また、個人的
発達における、技能の修得。

活用に関する研究(第一報)「富山大学教育学部付属
教育実践研究指導センター紀要(平成二年十二月)の
一部をもとにまとめ、さらに加筆し考察をすすめたも
のである。

△注1▽ランゲフェルド著/和田修二訳『教育の人間学
的考察』P. 144-145 未来社 一九七九

△注2▽同 P. 199-200

△注3▽グレーテ・A・ロイツ著/野村訓子訳『心理劇
人生舞台に モレノの継承と発展』P. 69 関係学研
究所 一九八九

△注4▽J. L. Moreno "Psychodrama" Pa, Beacon
House 1977

△注5▽同注3 P. 25

△注6▽同注3 P. 9

△注7▽A・A・シュツェンベルガー著/篠田勝郎訳
『現代心理劇—集団による演劇療法と自発性の訓練—』

P. 23 白水社 一九七三

△注8▽筆者は、日本心理劇協会会長松村康平(元お茶
の水女子大学教授)の下でサイコドラマティストとし
ての訓練を受ける

△注9▽松村康平『心理劇—対人関係の変革—』
誠信書房 一九六〇

△注10▽H・A・ブラットナー著/松村康平監訳『アク
ティング—イン』P. 5-6 関係学研究所 一九八
七

△注11▽同 P. 167

△注12▽同 P. 178-179 表はP. 188

(富山大学教育学部)